

1 学校名等

学 校 名	宇治市 立 広野 中学校				校長名	藤本 いずみ
研 究 主 題	自分の考えを持ち、受け手の状態に応じて丁寧に伝えられる生徒の育成					
研究の目的	<p>これからの変化が激しい社会では、認知能力だけでなく、学ぶ意思・意欲や学ぶ方法といった社会情動的スキル（非認知能力）を併せ持つことが大切である。認知能力と非認知能力の一体的な育成には、認知能力、非認知能力それぞれを意識した取組を行うと同時に、自らの状態を認識・説明し、受け手の状態を分析・確認しながら、自らの思いや考えを伝えていく必要がある。また、高度な自己認識や現状分析には当然、それを言語化できる語彙力が必要であり、そのような意味においても、認知能力と非認知能力の一体的な育成は大切であると考えられる。</p> <p>そこで、生徒自身の「～したい」という思いや「～になって欲しい」という感情を論理的な裏付けを持って説明する経験を通して、社会に出た際に、主体的な意思を持ち、かつ論理的な裏付けのある行動がとれる人材へとつなげていけるのではないかと考えている。</p>					
学 年	1 年	2 年	3 年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	5	5	6	2	1 8	3 6
生 徒 数	1 8 2	1 8 3	2 1 0	1 1	5 8 6	

2 研究校の概要

(1) 学校概要

宇治市の南部に位置し、各学年 5 学級規模の生徒数 586 名の学校である。近隣には山城総合運動公園（太陽が丘）や宇治市植物園等があり緑に囲まれた環境にある。

(2) 生徒の状況

- ・まじめでコツコツ頑張る生徒が多い。
- ・自分の意見を発表したり、思いを伝えたりすることに苦手意識のある生徒が多い。
- ・テスト等の記述問題では、無回答で提出する生徒はここ 2 年を見ると減少傾向である。

(3) 学力の状況

- ・全国学力・学習状況調査や京都府学力診断テストの結果では、どの教科も全国・府平均程度ないしは少し下回る程度である。
- ・一方で、努力が成果に結びつかない生徒も一定数おり、得点分布のバラつきがみられる。
- ・質問紙調査の結果についても、概ね全国・府平均程度である。

3 主な研究活動

(1) 各教科での授業改善（通年での活動）

各教科における見方・考え方を大切に、全ての教科で以下の取組を行った。

- ・各教科による課題解決型の学習（PBL）の要素を取り入れた改善（継続発展）

後述の 2 年生での総合的な学習の時間を軸とした課題解決型の学習（PBL）の取組は、与えられた一つの課題を解決するためのスキルを体得するだけでなく、PISA 型読解力という汎用的な能力の育成につながっていることは、3 年生での総合的な学習の時間での

生徒の様子から見られた。

それらの成果から、各教科の特性を踏まえて、単元やまとまりを意識して解決すべき問いを単元やまとまりの冒頭に提示し、その後の授業内容が解決に向けたステップになるように設定するという授業のデザインを引き続き行った。また、このような取組の場合の多くは、課題は文章で答える（レポート）形式で出されることが多いが、実技をとまなう場合には、成果物を求める教科もあり、まさにテキストだけでなく、広範囲な非テキストでの表現も活用するような課題であった。

このような教科での取組は、個々の教科の力を伸ばすだけでなく、そこで養われた汎用的な力のいくつかを組み合わせることで、課題に対しての高度なアプローチにつながる。

• 個人の伸びの見える化を目指した改善（継続発展）

京都府教育委員会が実施している京都府学力学習状況踏査（以下、「学びのパスポート」）では、IRTを活用した年1回の学力テストを通して、生徒が個人の学力の伸びそのものを捉えることができるという特徴がある。生徒が自分の学力の伸びをスモールステップとして捉えられるようにすることは、生徒の成長を促すことにつながる。単元1枚の各時の振り返りを書き溜めていくようなプリントを作成し、単元の最初に単元末の課題について予想を立てて、単元の終わりにその予想を検証するようにして個人内の考え方の変化を捉えさせる教科があった。また、昨年度に引き続き、複数時間にまたがって作成していく成果物を毎時間タブレットで撮影し、ポートフォリオのようにして変化を捉えられるようにした教科もあった。

• 到達目標の共有に向けた到達点（ループリック）の設定（継続発展）

各教科の授業改善の取組の中で、課題の設定とその評価基準（ループリック）の設定を試みた。その際、ループリックを伴う課題は、単元のまとめ（単元課題）である必要はないが、少なくとも該当単元の「肝」になる部分を対象とすることとした。この点については、ループリックの活用には慣れない場合、単元末課題をループリック評価にすると、その評価が単元評価に直結するという錯覚や誤解を生む可能性があることに加え、教科の特性等を考慮した場合、必ずしも単元最後にループリックを活用した課題を出す必要はないと考えたからである。

ループリックの設定は、評価の際の基準となるだけでなく、それぞれの教科の見方・考え方やその単元や内容のまとまりの中での学習のポイントと、出題側である教員が求めている回答の深度（質感）を示すという役割もあると捉えられる。

（2）総合的な学習の時間を軸にした取組

• 教科を貫く総合的な学習の時間

総合的な学習の時間の課題解決型の学習は、各教科の見方・考え方を複数使い、総合的に事象を捉えてその内容を理解、利用、評価、熟考するといういわばPISA型読解力が試される場としての価値を持っていると考えられる。そこで、2年生で「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」への参加をすることを念頭に、地域課題の解決などの取組をおこなない課題解決型の学習で涵養されると考えられる汎用的な能力を活用、伸長する機会を複数持った。また、課題解決型の学習をおこなう際のループリックを作成し、生徒が進捗を確認できるように考えた。

・1年生

1年生の総合的な学習の時間は「防災」を軸に展開されている。その中で、校外学習として神戸市内散策と防災センターを班別行動で訪れた。計画を立てる際に班ごとに時間も計算しながらチェックポイントを回っていくことを考え、実際の体験後にそのまとめをする等をおこなった。また、3学期には2年生へのつながりを考え、「職業とは何か」ということや、将来に向けて今の自分がしておかなければならないことを考えるような単元を設定した。

・2年生

2年生は「キャリア教育」を軸に総合的な学習の時間は展開される。その中心を「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」と設定し、校外学習、職場体験学習もその課題とのかかわりを意識して取り組んだ。

<きょうと明日へのチャレンジコンテスト（5月～1月）>

京都府教育委員会主催の「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」への参加を通して、グンゼ株式会社からの「10年後の時代に合ったここちよいインナーウェアを創造してください」という課題に2年生が取り組んだ。

企業そのものを理解するところから始まり、10年後の環境や生活様式も踏まえ、いわゆる調べ学習にとどまらず、まさに社会課題に対する対応策を幅広い分野からアプローチし、アンケート等を通して自ら情報そのものも入手する過程から体感をした。

<校外学習（7月）>

班別行動で京都市内の文化的施設を回ることに加えて、街中でインタビュー調査を行い、「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」に向けてのデータ収集を行った。このインタビューの結果を自分たちの課題の明確化に利用し、提案の裏付けに利用する等、様々な方向性で自ら収集したデータを活用することができた。

・3年生

アントレプレナーシップを軸に展開される「総合的な学習の時間」では、身近な課題の解決に向けての取組をおこなった。例えば、より良い学校生活を送るために必要なことについてグループごとに検討、提案をするなど、中学校3年間で身に付けた汎用的な能力を発揮する場を設けた。

4 今年度の研究の成果と検証

(1) 総合的な学習の時間におけるルーブリックの作成と活用

・課題解決型の学習と PISA 型読解力

PISA 型読解力は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、テキストを理解し、評価し、熟考し、これに取り組むこと。」（2018）と定義されているが、本校では下線で示したような要素に分解して捉え直して考えた。つまり、PISA 型読解力には、「社会参加」「テキストの理解」「テキストの評価」「テキストの熟考」「取組」という5つの要素の上に成り立っていると位置付けたということである。

この5つの要素を内包した教育方法としては、課題解決型の学習が挙げられる。京都府教育委員会が主催する課題解決型の学習の事業、「きょうと明日へのチャレンジコンテス

ト」では、その審査基準が「伝える」「調べる」「考える」「まとめる」「深める」「交わる」の6つのカテゴリーにまとめられている。

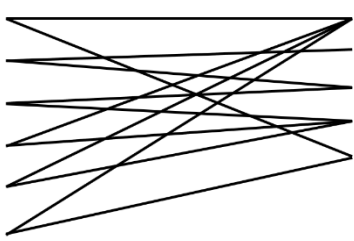
教員だけでなく生徒にとってもイメージしやすいという点も考慮して、作成するルーブリックについては、後者の6カテゴリーとすることとした。またその際は、PISA型読解力の5つの要素と、6カテゴリーの関係を検討し図のようにまとめ、どちらを基準にルーブリックを作成しても育んでいく力に齟齬が出ないように配慮した。

・京都府PBLでの評価の観点

伝える
調べる
考える
まとめる
深める
交わる

・PISA型読解力

効果的な社会参加
テキストの理解
テキストの評価
テキストの熟考
取り組む



・ルーブリックの作成と運用

課題解決型の学習コンテストの審査基準と、PISA型読解力の定義・要素との関係をはっきりさせた上で、課題解決型の学習におけるルーブリックを作成した。

作成したルーブリックは各時間の総括や振り返りで活用すると共に、ラミネートしたものを教室に置き、いつでも確認できるようにした。

宇治学PBLルーブリック

プロセス			C	B	A	備考
1	伝える	伝わりやすい内容となっているか	聞き手を意識して伝えることが不十分である。(聞き手への理解が不十分である)	聞き手を意識して伝えている。(聞き手が求めていることに答えられている)	十分に聞き手を意識して伝えている。(聞き手に寄り添った伝え方ができている)	内容や表現
			ツールの活用に課題がある。(ツールの特徴の理解が不十分である)	ツールを有効に活用している。(ツールの特徴が理解できている)	ツールを十分有効に活用している。(複数のツールを組み合わせ、わかりやすくしている)	
2	調べる	事実を調べられているか	調査が不十分である。	調査できている。	十分調査できている。	
			ターゲットの特定が不十分である	ターゲットが特定できている。	ターゲットが十分特定できている。	
3	考える	課題の特定ができているか	課題が明確でない。	課題が明確である。	課題が十分明確である。	調べること、考えることがはっきりしている。
		課題解決に向けたアイデアを実施するための検討がされているか	アイデアを実施するための検討が不十分である。(夢見事である)	アイデアを実施したことによるメリット、デメリットが示されている。	アイデアを実施したことによるメリット、デメリットが十分に示されている。	
4	まとめる	課題解決に向けた提案となっているか	これまでの教科等の学びを十分活かすことができていない。	これまでの教科等の学びを活かすことができている。	これまでの教科等での複数の学びを十分活かすことができている。	
5	深める	検証を行っているか	提案の理由が明確でない。	提案の理由が明確である。	提案の理由が十分明確である。	データや研究結果、証拠を示している
			実現可能性が低く、その原因が特定できていない。	実現可能な提案、もしくは実現可能性が低い場合はその原因が特定できている。	複数の視点から検討し、十分に実現可能な提案である。	
6	交わる	チームで取り組んでいるか	十分協力ができていない。	協力している。	十分協力している。	

このルーブリックの特徴は、A、B、Cそれぞれの基準を示しているが、その基準自体は評価者（作成者の意図としては、学習者の自己評価）の感覚に頼る部分が多いということである。実際、毎時間の総括の中で、ある項目でAを付けていたものが、次の時間にCになっているケースがあった。その班に聞き取りをすると、取組を進めていく中で自分たちが十分でないことに気付いたと言うことであった。本来のルーブリックの役割からすると、普遍的・一般的な基準を示せることが望ましいことではあるが、課題解決型の学習のような「正解のない問い」に取り組む場合には、ゴールの設定が難しいことから、普遍的・一般的な基準を作成することも困難である。そこで、ルーブリックを

活用することのみでなく、ふり返りの文章や聞き取りによって、学習者の学習の深まりによって、評価の基準が変化していくことにも気付かせるように心がけた。

(2)教科におけるルーブリックの導入

・教科におけるルーブリック利用の考え方

総合的な学習の時間においてのルーブリックは前述のような内容でおこなったが、各教科においてもルーブリックを活用することを試みた。

その際の基本的な考え方は、教科の学習を進めていく中で、授業者が望んでいる進捗と深度を明確に示すことである。この基準を示すために右図のようなシートを作成した。

このシートでは単元計画を基本に、その単元でのポイントを絞り込み、その場面でルーブリックを活用する仕掛けをしていくことを狙っている。これにより、ルーブリックの評価を単元評価の一部として扱えることを明確にすると同時に、学習者から見ても求められていることを掴みやすくすることを意図している。

・教科におけるルーブリック活用の効果

<社会科による活用>

3年生社会科では、ルーブリックを活用し、学習者の理解が高まったと考えられる。10月中旬におこなった単元課題では、評価の基準を作成はしたものの、学習者には提示しなかった。また、12月初旬は評価の基準を学習者にも提示した場合である。単元構想シートに基づいて作成された

ルーブリックは、観点も含めて設定されるため、学習者は問われている内容と求められて

いる深度を確認しながら課題に取り組むことができたと考えられる。

<技術科による活用>

技術科では、3年前からルーブリックによる評価に取り組んでいる。同じ課題、同じルーブリックでの評価をした際の学年ごとの評価の割合を次の表に示す。

この表から、まず、1年生、2年生ともに、年を追うごとに授業改善が進んでおり、課題の評価が上がる傾向にあることが示されている。2年生のR3からR4について、特にA評価の割合が伸びているが、それはR4の生徒は1年生の時からルーブリックによる課題に取り組んでおり、学習者自身も慣れとともに評価基準を活用して課題に取り組むこと

学年	教科	担当者			
単元名			時期	月	旬
単元目標					
ルーブリックを活用した課題			実施のタイミング	単元終了時 () 時間目	
課題で見取りたい主な資質・能力	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度		
ルーブリック					
A		B		C	
単元計画					
時数	授業の題名	評価規準	知技	思判表	主体態
1					
2					
3					
4					
5					

社会科課題における評価の割合

	A	B	C
10月中旬	3.9%	34.9%	61.2%
12月初旬	16.8%	74.4%	8.8%

ができていると推測される。

次に、R3の1年生はR4の2年生に、R4の1年生はR5の2年生になることからC評価が減り、A評価、B評価が増加している様子が見られる。

技術科課題における評価の割合（授業改善の経過）

1年生技術	A	B	C	2年生技術	A	B	C
R3	25%	42%	33%	R3	23%	54%	23%
R4	26%	53%	21%	R4	58%	38%	4%
R5	36%	41%	22%	R5	55%	43%	2%

(3) 研究主題とのかかわり

ルーブリックを活用することによって、教科の内容そのものについても、教科の学習を通して身に付く汎用的な能力についても、教科の学びが深みを増し、総合的な学習の時間とのつながりが密になってきた。その上、総合的な学習の時間での課題解決型の学習はアウトプットも求められるため、聞き手のニーズに合わせた伝える内容、伝え方への配慮が必要とされる。学習内容の深まりによって、学習者はより自らの考えを発信する意思・意欲が見られるようになった。

本校の研究主題は「自分の考えを持ち、受け手の状態に応じて丁寧に伝えられる生徒の育成」である。直接的にコミュニケーション能力を向上させることは難しいが、このように伝えたい内容・深度を作り出す学習を仕掛けることで、直接アプローチしにくい部分にも効果がみられると考えられる。

5 今年度の課題

総合的な学習の時間を活用した課題解決型の学習は、本校では4年目の取り組みになり一定の流れができているが、各教科の授業に課題解決の要素を取り入れた改善については、今後も取り組んでいく必要がある。また、教科におけるルーブリックについては、年間を通して位置付けられたものではない。単元計画シートを積み重ねることによって年間を通した授業スタンダードにしていくことができれば、より効果が期待できると考えられる。

また、ルーブリックの作成自体はその学級の授業を担当する授業者がおこなう方が良いという体感がある。これは、授業と課題の一貫性や継続性を鑑みた場合に、よりその方が指導と評価の一体化が図れると考えられる。その点からも、一度作成した課題やルーブリックについても、常に改善、見直しをしながら展開していくことが必要であり、その素地（雰囲気）を醸成していく必要がある。

6 研究成果の活用について

PISA型読解力は、汎用的な能力として学校教育のあらゆる場面で意識をして、育成していく必要のある能力であると考えられる。ルーブリックを活用して、学習者にゴールを見せていくことも含めて、引き続き継続的な取り組みを続ける必要があると考える。

大切なことは、常に改善の視点を持って進めていくことであり、教員も含めて課題解決に取り組む続けることが大切である。